

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano の転載許可済 ©1983 精道教育促進協会 会(芦屋)三二・三四五二 芦屋市船戸町12 6

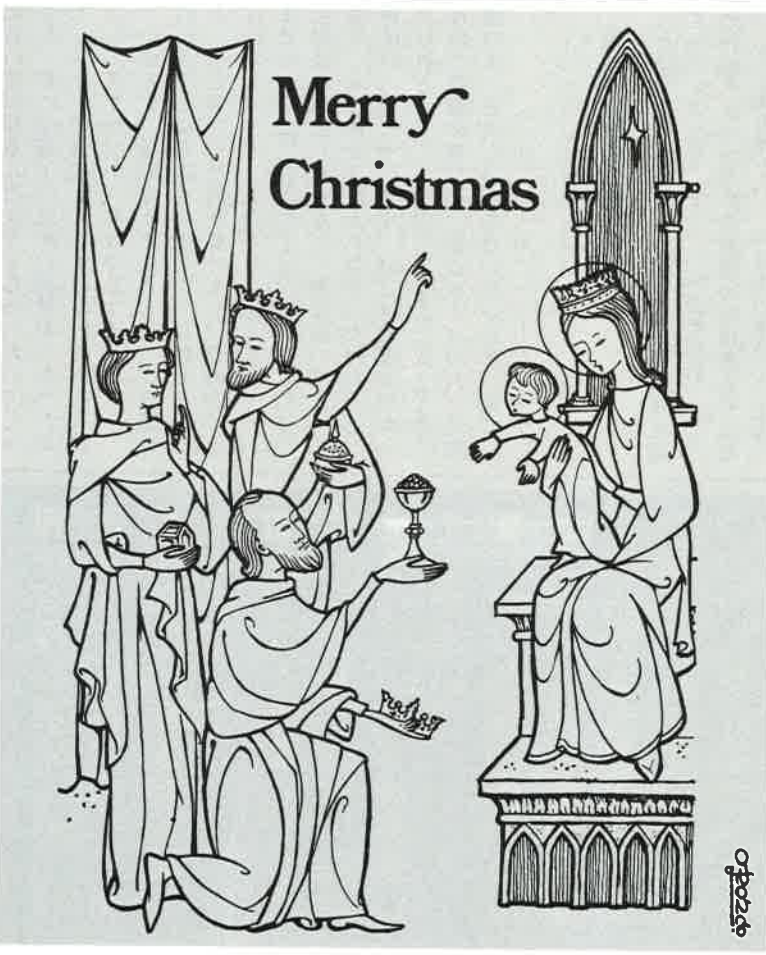
教皇様の叢

ご降誕のよろこび

現代世界という広いベトレヘムで、
キリストが宿を見つけることができますように

ローマ、そして世界のみなさん、キリストの生誕の聖なる日が頂点に達したこの時、ご降誕の秘義を黙想いたしましょう。「はじめにみことばがあった。……みことばは神であった。……万物はみことばによって創られた。創られたものうちに、一つとしてみことばによらずに創られたものはない。みことばは肉体となって、私たちのうちに住まわれた。」(ヨハネ1・1、3、14) 宿には彼らのための部屋はなかった。(ルカ2・7) 「みことばはご自分の家に来られたが、その人々は受け入れなかった。みことばは世にあり、世はみことばによって創られたが、世はそれを認めなかった。(ヨハネ1・11、10)

た時、宿に部屋がなかったのはなぜでしょうか。なぜ、ご自分の人々が御子を受け入れなかったのでしょうか。世界はなぜ彼を知らなかったのでしょうか。ベトレヘムの夜の秘義は間断なく続いており、世界の歴史を満たしています。そして、私たち一人ひとりの心に呼びかけます。ベトレヘムの人々は一人のこらず、ヨゼフとマリヤを前にしながら、部屋がないのでおうけできません、と言いました。あらゆる時代の人々は人となられたみことばにこう言うことができるのです。あなたをお受けできません、部屋がありませんから。世界は、彼によって創られたが、彼をうけ入れなかった。どうして、神のご降誕の目が神を拒む日となってしまったのでしょうか。キリストご降誕の秘義を人間のレベルまでもってゆきましょう。「彼はご自分の人々の間においてになりました。」人々がキリストに心の扉を閉じたのはなぜなのか考えてみましょう。



さしつかえや言いわけや理由は数限りなくみつかることでしよう。人間の良心ではそれらを把握することも、裁くこともできにくいと思われれます。全知の御方のみが人間一人ひとりの心と良心の奥底まで見透すことがおできになります。神のおできになるのです。つまり、永遠にお生まれになる御方、すなわち御子だけです。「父は子に審判のことをまったく任せられ」ました。(ヨハネ5・22)

たがために、いかに多くを失うことでしよう。キリストに出会いながら、キリストのうちに御父を見出さない人々は、どれほどの損失を被ることか。神は父であるご自分を、キリストのうちに、お示しになったのですから。キリストのうちに自分の人間性を見出さない人間の損失は、いかばかりでしょう。キリストはあますところなくご自分を人々に示し、人間の崇高な召しだしを教えてくださいました。ですから、『現代世界憲章』22)「その方を受け入れた人々にはみな神の子となれる力を授けた。(ヨハネ1・12)

荘厳なご降誕祭にあたって、熱烈な望みと希望、謙遜な祈りも同時に生まれます。今の時代の人々がキリストを受け入れますように。色々の文化、文明をもった諸国民が彼をうけ

入れますように。人々が再びキリストを見出しますように。彼のみが有するゆえ、彼からのみくる力が、与えられますように。

政府や国家の元首、諸制度と社会に対し大声で叫びたいと思います。あらゆる所で信教の自由の原則が尊ばれますように。キリストを信じるという理由で、偏見の対象になったり、市民としての業績が剝奪されることのあるキリストの教会に牧者や礼拝の場所の欠けることがないように。牢獄、死刑宣告の迫害がありませんように。東方のカトリック教会が西方の教会の兄弟姉妹と同じ権利を享受することのできますように。

現代世界という広いベトレヘムで、キリストが宿を見つけることのできますように。チェ

ベトレヘムからのメッセージ



人類史の転機を示す秘義、つまり、御子の誕生―神の御子・救い主の誕生―をふたたび体験することができるよう、待降節の典礼を通して準備に精をだしてきました。

「宿には彼らのための部屋はなかった。」
神を受け入れない世界は人々に対し親切であるわけがありません。経済的、帝国主義と戦略上という色々な利害の名目によって、多くの人々をその職場から引き出し、収容所に閉じこめ、祖国をもつ権利を取り上げ、飢えに追いこみ、どれいにしてしまうという世界、我々はそのような世界展望を目にして、不安になっていないでしょうか。

「宿には彼らのための部屋はなかった。」
神を受け入れない世界は人々に対し親切であるわけがありません。経済的、帝国主義と戦略上という色々な利害の名目によって、多くの人々をその職場から引き出し、収容所に閉じこめ、祖国をもつ権利を取り上げ、飢えに追いこみ、どれいにしてしまうという世界、我々はそのような世界展望を目にして、不安になっていないでしょうか。

「宿には彼らのための部屋はなかった。」
神を受け入れない世界は人々に対し親切であるわけがありません。経済的、帝国主義と戦略上という色々な利害の名目によって、多くの人々をその職場から引き出し、収容所に閉じこめ、祖国をもつ権利を取り上げ、飢えに追いこみ、どれいにしてしまうという世界、我々はそのような世界展望を目にして、不安になっていないでしょうか。

説教・講話・書簡等の抄記

史であると言えるでしょう。ところで、これらは全て、神においてのみ、完全な私たちで現出せる現実です。しかも神ご自身が、超越性という、本来超えるを得ない深淵を渡り、私たちの生きざまをご自分のものとし、私たちの兄となるまで近づくと決心してくださいました。これがクリスマス・メッセージなのです。

以上がクリスマス本来の姿です。みなさんは神を捜し求めておられますか。それなら、兄弟たちのうちにいます神を捜してください。キリストは私たち一人ひとりに同化して下さったのですから。

キリストを愛したいと思いませんか。では、兄弟のうちにいます神を愛してください。仲間のだれかにしてあげることを、キリストはご自身への行為と考えてくださいます。心をひらいて隣人を愛するならば、隣人との平和な関係をうちたてようと努力するならば、また、分かち合うよるごびがさらに大きくなるように財産を分かち合うならば、キリストはみなさんのかたわらにとどまり、私たちは、心に夢みる目的地、つまり、一層正義にかなない、より一層人間的な世界に、キリストとともに到着することができましょう。

クリスマスにあたり、ベトレヘムのまぐさ桶から届けられる使信を再発見できるように精をだしたいものです。少しばかり勇気がいるでしょうが、それだけのねうちはあります。キリストの来臨に向けて心を開きさえすれば、あの聖なる夜天使が告げ知らせた平和を自分のものにする事ができるのです。みなさんがた全員が、このクリスマスに、キリストに出会えますように。キリストは人となり、すべての人に神の子となる力を与えてくださったのですから。

若いみなさんに挨拶を送ります。神の御子は、「私たち人類のために、私たちの救いのために」、死を免れない肉の体をとって天国から

くだり、かぎりない愛を示された。これをおいださせてくれるクリスマス・メッセを間近にして、あなたがた一人ひとりの心のうちに、隣人に対する誠実な愛の心が湧き起こり、神が豊かにお与えになったタレントを兄弟たちに仕えるために使う決心ができますように。

次はご病氣の方々にご挨拶を送ります。愛する兄弟姉妹のみなさん、すばらしく甘美な想いを心のうちにひろげてくれるクリスマス・メッセの光の下で、みなさんに心の静けさと平安とを特にお祈りしたいと思えます。御子イエズ

待降節の第四主日にあたる今日、あの預言者ミカヤの声が聞こえてきます。「そして、エフラタの地ベトレヘムよ、おまえは、ユダの家族のうちで、もっとも小さい者だが、イスラエルを治めるものが、おまえから生まれねばならぬ。その日は、ずっと以前、昔の日にさかのぼる。(ミカヤ5・1)

この言葉を耳にする、主キリストがお生まれになるベトレヘムへと導かれます。主の最初のご降臨が成就することを知らせ、ご降誕の喜びを声大にして告げているからです。それで、私はきょう、すべての人々、すべての家庭、とくにこのローマの人々にこの喜びを告げたいと思えます。

この喜びが、とりわけ苦しむ人々のいる所に届きますように。キリストの救いを知らせるこの喜びの便りが、病に苦しむ人々、自由をうばいとられた人々、さらには人生に見捨てられ打ちのめされた生活を送るすべての人びとに告げられますように。

愛する子供たちへ



イエズス様のやさしい行ないを
すすんでまねなさい

いました。クリスマスはあなたがたのお祝いです。というのは、クリスマスとは、神さまのおんひとり子がみなさんと同じように、おさない子供になってくださった日だからです。神さまはかぎりなく偉大なおかたなのに、小さくなってくださいました。でも、そのかわ

スが誕生の時に味わわれたあの困窮と不快を想い、苦しみの中にいられるみなさんが慰めをえてくださいますように。そしてみなさんの苦しみは、まぐさ桶の中からすでに贖いのみわざを始められた主に近づく機会となることを知ってください。

聖なるクリスマスを直前にひかえた今日、この聖ペトロ広場には、例年のようにローマのあちこちの教会から、大勢の子供たちが、私に幼子イエズスの小さなご像を祝別してもらうために集まっています。

愛する子供、皆さん、ようこそ来てくださるに幼い人たちが子供たちを、大きく、立派にしてくださいました。

愛する子供たちよ、クリスマスをお祝いするとき、イエズス様のことをまわりの人々に知らせるのはみなさんの役目です。そうして、人々に喜びを分け与える人になりましょう。せっかくなので、クリスマスを手に使って、もっとよくイエズス様を知りましょう。そして、イエズス様の弟子になりましょう。キリスト様は私たちを救うために、あの夜ベトレヘムで赤ちゃんになってくださいました。今日みなさんが持ってきた幼きイエズスの小さなご像を、心から祝福したいと思えます。

それだけでなく、イエズス様はこのクリスマスに、みなさんがたがイエズス様の代わりをするように招いておられます。みなさんのおうちで、お父さんとお母さんの前で、それから、苦しみや悲しみを背負っている、とくにこのクリスマスに、イエズス様のやさしい行ないをすすんでまねなさい、と招いておられるのです。

幼きイエズスのおそばにいれば、みなさんにも、神さまを知り、お愛し申しあげることができ、また人々にもそうするよう助けをあげることができます。

みなさん方一人ひとりに、喜びあふれる聖なるクリスマス・メッセと心からの祝福を送ります。(一九八二・十二・二十三)

不変の教え

責任ある親



(一)この度の研究会でみなさんは、なぜ、故パウロ六世が「フマーネ・ヴィテ」を發布し、また、なぜ私が使徒教令「ファミリアリス・コンソルツィオ」で同じ教えを繰り返したかを、研究されました。倫理を教えたり、家族の司牧にたずさわったりする人々にとつて、なぜ先の回勅や教令のような教えが伝えられたかを知ることが、すこぶる重要かつ緊急の課題であります。その教えが忠実に、しかも十分に提示されるだけではなく、なぜそのような教えが繰り返され提示されるかを、深く知る必要があるのです。

何よりもまず神学面を検討しなければなりません。一人ひとりの人間の起源は、神の創造のみわざのおかげです。偶然に生まれる人など居ません。人間は誰でも神の愛の対象であるからです。信仰と理性両面のこの真理から、人間の性に刻み込まれている出産能力は真に、神の創造のみわざへの協力を意味します。それと同時に、夫と妻は調停者でも、生殖能力を自由にできる立場にいるのでもなく、それを使って、神の創造に与るだけです。それゆえ、夫婦が避妊して、夫婦行為のもつ創造の力を放棄するとすれば、神にのみ属する力を、つまり、一人の人間を誕生させるか否かの決定権を自分のものであると主張することになってしまいます。自らを神の創造力の協力者ではなく、人間生命の最終的な委託者にしてしまうのです。こういう面から問題を視るなら、避妊行為はあくまでも非合法であり、決して正当化できないことがよくわかります。そう考えていない人、反対を述べる

人は、神を神と認めなくても良いような時があると、主張することになるでしょう。

避妊は夫婦愛のまことにそむく

さらに、人間的な理由もあります。「フマーネ・ヴィテ」と「ファミリアリス・コンソルツィオ」の内容は、人格面を考えてももうなづくことのできる教えです。実は、この人格面がそれらの教えの基礎にあるわけです。夫婦行為に刻みこまれて一致(交わり)としての意味と出産の意味との間には切り離すことのできない関係がある、と回勅は述べています。両者の関係を知れば、体は人間存在をなす部分であること、また、体は人間存在に属するものであって、ただ人間がもっているといえるものではないことがよくわかります。夫婦行為は夫婦愛の表現であり、それによって夫婦は、互いに自らを贈るよう召されています。一人格を作り上げているものは、たとえわずかであっても、この自己を与えるという行為から除外することはできません。この点については、第二バチカン公会議の、まれにみる深い洞察に目を通してみましょう。「感情を伴う意志の働きを通してひとりの人間がもうひとりの人間に向かうこの愛は、すぐれて人間的なものである。……この愛は人間的なものと神的なものとを合わせ、細やかな愛情とその表現によって表現される自由な与え合いに夫婦を導く。」(『現代世界憲章』No.49)

A persona in personam (二人の間で)。このような簡単なことばで、夫婦愛の本質、

二人の人格全体を包む愛、を見事に表現しています。人格、人格の善 (totius personae bonum completitur) 全人格をつつむ愛、である善に焦点をあてているのです。そして、夫婦が与えあう善とはこのような善のことです。(iberum et mutuum sui ipsius donum) 互いが自由に与え合うのです。避妊行為は、この相互の与え合いに重大な制限を課し、双方がそれぞれ相手に、女性として、男性としてのすべての善を与えるのを拒む、という意志表示になります。つまり、避妊行為は夫婦愛の真に反する、ということなのです。

神法を軽視することはできない

夫婦が神法に忠実を保つにあたって出会う困難を無視することはできません。このような困難はみなさんの研究対象でした。夫婦にはできるかぎり助けの手をさしよなければならないなりません。

とくに、夫婦が自分のおかれた事情に応じて神法に段階づけをする、と言ったようなことは絶対にさけるべきであります。道徳律は結婚に関する計画を示してくれます。つまり、夫婦愛にかかわる善のすべてを示してくれるのです。従って、神のこの計画を小さく考えるようなことになれば、それは、人間の尊厳を尊ばない、ということになってしまいます。神法は人間人格についての真理が要求することから表わされています。神の知恵が示す秩序を教えてください。聖アウグスチヌスが教えているように、「神法は、この世に生きる間に守れば、私たちに神に導き、守らなければ神に到達することはできません。」(De ordine, 1, 9, 27)(…)

ここで、キリスト教倫理の中心となる真理を思い起こしておきたいと思えます。先日、聖母のご誕生を祝う日、「教会の祈り」に次のような引用がありました。「法の完成とは次の通りである。すなわち、立法者ご自身がみ

の通りである。すなわち、立法者ご自身がみわざを完成し、文字を霊に変え、すべてを自身において終結させられた。そして、法に従っておられたが、恩寵によって生きておられた。彼は、法を従わせたが、同時に法に恩寵を見事に調和させた。法と恩寵両者のちがいをあいまいにせず、神に最もふさわしい方法で文字から霊への変化を実現した。ちょうど、厄介で、過酷、隷属を強いるものすべてを、軽くて、自由にするものにかえることによって。(クレタの聖アンドレア Discourse 1, PG 97, 806)

信者に与えられる霊は私たちの心に神法を刻みつけます。しかも、外からほめかすだけでなく、とくに心の中で。真の夫婦愛に事実に、忠実を保ちえないような状況があると主張するならば、それは、新約の特徴であるこの恩寵の働きを忘れることになりました。聖霊の恩寵があれば、人間の力だけではできないことも可能になるはずですが、それゆえ、夫婦の霊的生活を支えてやると共に、ひんばんにゆるしと聖体の秘跡にあずかり、真の夫婦愛に立ち返るよう、つまり、永続的な回心をすよう招いてやらねばなりません。

第二バチカン公会議『教会憲章』(No.39参照)が教えるように、信者夫婦は聖性に召されています。「唯一の聖性は、神の愛に動かされ、父の声に従い、霊と真理のうちに父なる神を礼拝し、キリストの光栄にあずかるために、貧しく謙遜にして十字架をになうキリストに従う全ての人の、さまざまな生活の仕方と各種の職務のうちに追求される。」(同No.41) 既婚者を含めすべての人々が聖性に召されています。しかし、この召しだしを完うするには、時として英雄的な行為が要求されることを忘れてはなりません。(…)

みなさんのお仕事に対して、私は心から祝福を贈ります。(一九八三・九・十七『責任ある親』についてのセミナーで。)

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部六十円送料六十円 一年予約七百二十円送料七百二十円 二十部以上の一括購入なら送料不要

替振郵便 神戸 3-72393